

月刊
JMITU **デケレカ**



3月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2025年発行

No.495

2026年春闘・夏季一時金要求回答

ライフシフト型勤務

よくあるごまかし手法

ベア十定昇

19020円

- ・給料定年前の60%
- ・上限43万円
- ・週3日勤務

・シフト作成、勤怠管理、部下の評価案作成、クレーム対応の最終責任、店舗や部署の数字管理。しかし会社はこう言う

セガ回答

4月1日からの報酬制度の改定についての説明がありました。

通常定期昇給は7月に行う。

セガについては一時金を1ヵ月分、月額賃金に回すので、今回はそれを理由に、一時金回答は会社としては、減らしていく可能性がありません。

「リーダー手当をつけているから問題ない」

- ・月額13000円のベースアップの実施。

夏季一時金については、まだ固まっていない。次回団体交渉、4月2日には回答できる。

また、プラス等級などという上部等級の役割を一部担う場合には、プラスで手当てが支給される。とあるが上部等級の業務を一部でも行うのであれば上部等級にあげるべきです。

「職務手当」で管理職務を丸ごと抱えさせる
会社がよく使う言い訳

- ・基本給に賞与の1ヵ月相当分を組み入れ、基本給を増加させる。

定年再雇用制度変更

定年後の再雇用処遇として3種類のバリエーションを用意し、会社の要望と個人の希望をすり合わせた待遇へ変更

「役職じゃないけど、職務手当で対応している」
「管理職ではないから残業代は出すよ(ただし業務量は管理職級)」

- ・テーブルの細分化により、昇給機会増加させる。

- ・副職位機能の処遇を反映(プラス等級の追加)

マエストロ社員(会社指名)

管理職でないのに一部管理職の仕事を行わせるなど、制度の管理職にする」と労基法上の責任が発生するため、役職は与えず、仕事だけ管理職級にするごまかし手法です。

実態は、会議出席は管理職枠、部署の数字責任、トラブル時の最終判断、人事評価の下書き
権限はないのに責任だけ管理職級という典型的な搾取構造

昇給については、ベースアップ

一律13000円

- ・給料正社員並みのオフアール
- ・フルタイム勤務の嘱託社員
- ・時間外勤務手当の対象外

他にも「代行」「代理」という名の恒常化、安上がりの管理職。育成目的で管理職務押しつけなど。

定昇1.55%

6020円(改定後)

- ・給料定年前の60%

・上限54万円

一時金の月額組み込みは入っていない。

- ・フルタイム勤務

SLS回答

定期昇給

本人給638円

評価給2674円

ベースアップ5000円

合計8357円 2.41%

- ・時間外勤務手当の対象外
- ・スタンダード型勤務

・給料定年前の60%+

定年前評価による調整給。

・上限54万円 下限24万円

・フルタイム勤務

アルバイトについても3%アップ行う

夏季一時金 係数2.2

799137円

インセンティブについては、經常利益がわかり次第制度に沿って支給します。

矢口事業所の修繕工事は随時行われる。

SLSについては、人事制度を導入してから、評価給テーブルの額を変更していないので、

大半の人がテーブルの上限に達してしまい、評価給が上がらなくなっている。評価給の平均を見ても、顕著に出ている。

人事制度導入時は頑張ったからその分、報酬が上がっていく制度ですと言われましたが、昇格のチャンスも少なく、ベースアップで調整していかなくては賃金が上がらないという、人事制度としては機能していない状態です。従業員が納得する制度へ変更するべきです。

定年再雇用制度変更

定年後の再雇用処遇として2種類のバリエーション

マエストロ社員(会社指名)

- ・給料正社員並みのオフア
- ・フルタイム勤務の嘱託社員

掌編小説

父母の若き時

仙洞田一彦

しれない。

一九三九年（昭和十四年）

末まで「襄東會戦後の警備及び贛湘會戦参加」となっている。

他のことを書こうとしても、

どうしても戦争のことに考えが行ってしまう。いつ何時、父母が経験した時代に戻ってしまうのかもわからないからだ。先が予測できない時代の感じがする。

東京神田で洋服仕立職人を

していた二十三歳の父は召集され、一九三九年（昭和十四年）年七月二十九日に「宇品港出帆」した。輜重兵二等兵だった。「輜重」とは「①軍隊が必要とする兵器・糧食・被服などの総称。②『輜重兵』の略。輜重の運搬・監視にあたる兵種（の軍人）。」（『岩波国語辞典』）のこと。「輜重」に被服とあるので、父が仕立職人だったから「輜重兵」にされたのかもしれないなどと、私は勝手に推測する。

一九四〇年（昭和十五年）

前年十一月一日より四〇年（昭和十五年）三月九日まで「冬期作戦参加」し、翌日三月十日より四月二十八日まで「冬期作戦後の警備に従事」している。

め九江出發」、九月一日「南京上陸」、九月一四日「南京出帆」とある。地図を見ると揚子江を船で下り、南京に二週間いたということか。

金もうけの邪魔になる政権

といつても、自分の国ではなく他国の政権。それを力によつてひっくり返そうとすることが横行しているからだ。いつの時代にもあったかもしれないが、最近特にひどくなったような気がする。危機をいっそう強く感じさせるのは、日本にかつてあったブレーキの利きが弱くなったからかも

前年六月の召集時「輜重兵二等兵」だったが、「冬期作戦参加」直後の十一月二十日「輜重兵一等兵」に昇格している。

している。

そして九月二一日宇品上陸となっている。およそ一年後に日本に戻っている。南京から宇品まで一週間を要している。「南京出帆」の翌日、父は船上だと思うが、九月一五日（勅令第五八一号に依り）「輜重兵」が取れて、単に「一等兵」となっている。そして九月二十八日「召集解除」。帰京し、再び神田の洋服仕立て職人に戻ったと思われる。

宇品を出た三日後の八月一日「上海港到着」。八月十二日は「南昌到着」。同日より十月

「宜昌作戦参加」となっていて、翌月八月三日「現地復員」とある。

一九四一年（昭和十六年）

八月三〇日「内地帰還のた

は二十一歳。母の父親と父の

三月、父母が結婚した。母は二十一歳。母の父親と父の

母親は兄妹で、いとこ同士の結婚だった。父母の実家は何度も通ったからはつきり記憶がある。実家がすぐ近くだったから父も母も、子どものころから知っていたはず。子ども

ものいない夫婦のところにと母、両方が養子に入る形での結婚で、東京の大森区（当時）馬込で所帯を持った。父は神田で仕事をしていたが、母は田舎から出て来たばかりだ。ところが養親との間がうまくいかず一年余りで離縁になり、父母は所帯を中野区に移した。母の話では養母との間が良くなかったようだ。

私は上京後（一九六九年八月）、父母がそのまま一緒に暮らしていたら義祖母にあたる人の家を訪れた。馬込で駄菓

子屋をやっていた。私は名乗り、父母のことを言い説明した。しかし、無表情のまま私の顔を見ていただけで何も言葉が発しなかった。

人違いなら「違う」そう言うだろうと思った。だが言わない。私の父母とその人のあいだについて「離縁」したという以上の事は何も知らない。何を言うべきか私にはわからない。沈黙に私はいたたまれなくなつて、すぐに帰つてきた。

一九四二年（昭和十七年）

召集解除からは約一年半後、養親との離縁からは日を置かないで、父は二度目の召集を受けた。

五月十二日、再び「宇品港

出帆」となった。このときは前回と違って上海ではなく

「釜山港上陸」、朝鮮、満州を通過し、五月二十三日「江蘇省常州到着／同地附近警備ならび清郷工作に参加」した。私は父が満州に行ったと思つてしたが、満州はこの時に通過しただけだったようだ。

父は三カ月後の一九四二年（昭和十七年）八月二十二日

「蘇州陸軍病院無錫分院」入院、十一月九日「上海港出帆」、同十二日「宇品港上陸」となつている。その後「廣島陸軍病院」「東京第2陸軍病院」を経て翌年――

一九四三年（昭和十八年）

四月二十八日に退院となつている。通算の入院期間は年

をまたいで八カ月だったことになるようだ。

銃剣術のけいこ中に肋膜でぶつ倒れたと、父から聞いた記憶がある。結核性の肋膜だった。それ以外の戦闘、戦場での話は聞いた覚えがない。軍帽に白衣の父の写真がある。陸軍病院で撮った写真だという。患者も白衣を着ていたようだ。

父は退院し召集解除の後、母の住む東京中野のアパートに戻つた。

一九四四年（昭和十九年）

父母は中野に住んでいた。その後、実家のある山梨県に疎開している。疎開は四五年（昭和二十年）のことと思われるが、四五年三月十日の東

京大空襲の前なのか、後なのかわからない。

私の姉は一九四四年（昭和十九年）の春に、中野で生まれた。その時に母の母、私からすれば祖母が、娘の出産のために上京してきた。父母の住むアパートの玄関先で撮ったという祖母の写真があった。記憶にあるし、実家のどこかに、その写真はいまもあるだろう。

姉はその四四年の暮れの二三日、九ヶ月の命を閉じた。死亡届が中野区に出されていた。亡くなったのが暮れだから、疎開したとすれば年が明けてからではないか。

一九四五年（昭和二十年）

四一年の馬込での写真。玄

四四年の玄関先の祖母の写真。姉の写真などが貼られているアルバムが残っていたということは東京大空襲前の疎開と考えられる。

六月三日、父に三度目の召集があり、六月九日「甲府出發」となっている。すでに山梨県にいたに違いない。

この時の行く先は「宇品」でも、上海でも、釜山でもなく「静岡縣駿東郡」だった。なぜ静岡か。すでに制空権、制海権を奪われ、出るに出不れない。残すところは「本土決戦」しかなかったからだろうか。

静岡だったから抑留というようなことにならなかったのは、不幸中の幸いだったといえるかもしれない。私にとっても、生まれた時に、ひよっ

とすると父がいなかったかもしれない。また私の妹や弟は存在すらしなかったかもしれないのだ。甲府の空襲は七月六日の夜だったが、父母の実家は甲府からは離れたところにあった。

軍歴証明書最後の行は八月三十日「召集解除」となっていた。

なお、父の兄は召集されて移動中だったのか福岡で、弟はレイテで戦死している。母は次兄が戦死している。

一九三九年夏から一九四五年夏の、父母の二十代の歩みのあらすじである。

父は戦地で結核になり、戦後十年くらいして再発し、入院生活を送らざるを得なかった。正確には入院が何年間だ

ったのか記憶にないが、私が小学校三年か四年くらいから六年までの間ではなかったかと思う。洋服仕立職人の父の収入で生活していたから、その間は生活保護で暮らしていた。

退院した後くらしがよくなつたわけではなかった。

地図や歴史の本をひっくり返しながら、経過を追ってみると加害の歴史、被害の歴史がわかってくる——とはいっても実体験した父母からすれば、私の「わかったこと」などほんの一部分にすぎない。しかし、そのほんの一部分にしても、知っているといえないほど大きな違いがあるようにも思う。

子や孫に、父母のような思いはさせたくないのだから。